

テキスト

ルカによる福音書 23章32～43節

〈背景と文脈〉

四福音書すべてが、主の十字架について記述しているが、どの福音書も肉体的な苦痛を描写して読者の感情に訴えようとはしない。むしろ罪のない神の子が罪人の一人に数えられ、身代わりとして刑罰を受けられたことによる霊的な苦悩、そこに追いやった人間の罪の重さ、またそれにもかかわらず、罪人をそれほどまでに愛しておられる父なる神と主イエスの愛を伝えている。特に、ルカ福音書のこの箇所は、十字架につけた者たちのための執り成しの祈り(34)と一人の犯罪人への約束の言葉(43)を記している点でユニークである。これらの記事は、主の罪人に対する愛の深さと、主を信じる者への恵みの深さを印象付ける。

〈十字架上の主イエスと人々の反応〉(23:32-38)

主イエスは二人の犯罪人と共に十字架につけられた。イザヤは「彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ」(53:12)と記している。罪のない神の子が罪人のひとりに数えられ、十字架につけられ、裁かれたのである。

主は十字架につけた者たちのために執り成しの祈りをされた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」彼らにとっては、主イエスは一人の犯罪人以上の何者でもなかった。しかし、このとき神は、罪のない最愛の御独り子を犠牲にされるという、人間が思いもよらない方法で、私たち罪人を救う道を備えておられたのである。この執り成しの祈りは、そのような罪人に対する主の限りない愛と憐れみを示すものである。この祈りが、最期の瞬間に主を信じた犯罪人を悔い改めに導いた可能性がある。十字架刑は残酷で、受刑者を肉体的に長く苦しめるものであった。人間の罪がどれほど底知れなく深いものであったかは、くじを引いてイエスの服を分け合った人々の姿や、議員や兵士たちの罵りの言葉が示している。

〈犯罪人の悔い改めと主イエスの約束〉

(23:39-43)

悔い改めた犯罪人の言葉は、彼が深い罪悪感を持ち、心を打たれていたこと、またイエスがメシアであり、再び来られる王である、と信じていたことを示している。彼は、イエスこそ罪のない聖なる方、また御国の王である、と十字架上で信じたのである。そして、「あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と嘆願した。多くの人々が、十字架から降りて自分を救わなければメシアではない、と言っているとき、対照的に、彼は、十字架上で息を引き取ろうとしているイエスこそ、まことの救い主であり、やがて来るべき御国の王(あなたの御国、42)である、と信じた。

主イエスは彼の信仰に応えて、彼が願う以上のことを約束された。「はっきりしておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」「楽園」(パラダイス)とは、主にあって死んだ者の魂がキリストと共にいて、キリストとの交わりにあずかるどころ(フィリピ1:23)であり、御国を指す(黙示録2:7)。

死者の復活が起こる再臨のとき、わたしを思い出してほしい、と願った犯罪人に、その時を待たないで、今日ただちにわたしと共に楽園にいる、と約束された。主イエスは十字架上で罪人のための贖いの死を遂げることによって、彼を信じる者はだれでも、死後ただちに楽園で主との交わりに入ることができる道を開いてくださったのである。

最後の瞬間に悔い改めて信じた犯罪人の記事は、十字架上で死なれた主イエスこそ楽園の鍵をもたれ、信じる者に永遠の命を与えることのできる、まことの救い主である、と確信させてくれる。主イエスは、その犯罪人の罪の贖いのためにも死なれ、贖いの死を通して、彼に永遠の命を与えられたのである。読者もイエスを救い主と信じて同じ恵みを受けるように促されている。(後藤公子)

テキスト

ルカによる福音書 23章32～43節

参照教理問答

子どもカテキズム 問24

(単元のねらい)

イエスさまは十字架の上でご自分を救われず、罪人の救いのために、身代わりとして刑罰を受けてくださった。そして罪人の贖い主として、罪人を罪の刑罰から解放してくださった。それゆえ、贖い主イエスを信じる者はだれでも、この地上での歩みを終えたのち、ただちに、主イエスと共に楽園にいくことができる。子どもたちが、イエスさまを自分の贖い主として信じるように導く。

楽園の鍵を持っておられるイエスさま

鍵はとても大切です。自分の家でも鍵がなければ入れませんね。外出したお母さんが帰ってきて、鍵で開けてくれるまで、何時間も外で待ってなければなりません。あるいは、だれかの家を訪ねるとき、ドアが閉まっていたら、私たちは中に入ることはできません。でも、その家に住んでいる人が中からドアを開けて、「どうぞ」と招き入れてくれるなら、私たちはその家の中へ入ることができます。このように、家の中に入るためには、その家の持ち主が開けてくれるか、入るための鍵をもっているかどちらかです。

今日の聖書の箇所は、イエスさまだけが楽園の鍵をもっておられて、わたしたちを楽園に招き入れてくださることのできるお方である、というお話です。

楽園は、楽しい園という意味です。皆さんは美しく広い公園に行って遊んだことがあるでしょう。また、遊園地にお父さんやお母さんと行ったことがあると思います。遊園地はたくさん遊べるものがあって、とても楽しいですね。また広い公園へ行って、青空の下で、たくさんのきれいなお花を見ながら、お弁当を食べるのは、本当に楽しいですね。そんなところへ行けば、時間がたつのを忘れてしまいます。広い公園で楽しく遊んでいるとき、「もう帰りますよ」とお母さんに言われて、「帰りたいくないよ」と駄々をこねたことがあるかもしれませんね。

聖書で言っている楽園は、公園の園や遊園地の

園という字と同じ字です。ですから、楽園は、私たちが行ったことのある公園や遊園地とは、ある意味で似ているのですが、でも違うのです。それよりはるかに素晴らしく楽しいところです。楽園は、地上の最も美しく、最も楽しい公園とも比べものにならないほど素晴らしいところです。そこにいると、とても幸せな気持ちになれるのです。

どうしてでしょう。それは、楽園には十字架にかかれ、よみがえられたイエスさまがおられて、イエスさまを信じて死んだ人は、その楽園で、イエスさまと、それは、それは楽しい交わりができるからです。

どうしてイエスさまを信じた者は、そんな素晴らしいところへ入ることができるのでしょうか。それは、イエスさまが楽園の鍵をもっておられて、イエスさまを信じる者を、中へ招き入れてくださるからです。どんな偉い人でも、どんなにお金持ちでも、どんな有名人でも、どんなに高い地位があっても、それだけでは、そこに入ることはできないのです。

どうして、イエスさまは楽園の鍵をもっておられて、信じた者を招き入れてくださることができるのでしょうか。その答えが、今日の聖書の箇所にあります。今日のお話は、イエスさまと一緒に十字架につけられた一人の犯罪人のお話です。この人がどういう人生を送ってきたのか、どんな悪いことをしたか、ということは、ここには具体的に書かれていません。しかし、マタイやマルコ福

音書を見ると、二人の犯罪人が強盗だったことがわかります。他人の持っているものを無理やり奪ったのです。もしかしたら、人を殺したかもしれません。十字架刑はローマ帝国では最も残酷な刑でした。どうしてかという、十字架につけられてから死ぬまで、とても長い時間苦しまなければならないからです。この人と一緒に、もうひとりの犯罪人も十字架につけられました。イエスさまはこの二人の犯罪人の真ん中で十字架につけられたのです。

一人の犯罪人が、イエスさまに、「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と罵りました。メシアというのは旧約聖書で神さまが約束しておられた救い主という意味です。この犯罪人は、もしイエスさまが本当のメシアなら、自分自身と我々を救え、と挑戦したのです。彼は、自分自身を救えないような者はメシアではない、と思っていたのです。

それを聞いたもう一人の犯罪人が言いました。「我々は悪いことをしたのだから、その報いとして十字架につけられたのは当然だ。でもイエスさまは何も悪いことをしていない。」二人の犯罪人のしてきたことは、十字架にかけられても仕方のないような悪いことでした。この犯罪人は、「でもイエスさまは違う、何も悪いことをしていない」と思ったのです。

マタイやマルコ福音書を見ると、初めのうちは二人ともイエスさまを罵っていたことがわかります。でも一人は途中から、イエスさまに対する見方が変わったのです。イエスさまは、父なる神さまに、「父よ、彼らをお救ください。自分が何をしているのかわからないのです」と、ご自分を十字架につけた人々のために祈りました。もしかしたら、その祈りを聞いて、見方が変わったのかもしれない。見方が変わっただけでなく、イエスさまを信じたのです。「この人は何も悪いことをしていない。聖い方なのに十字架にかけられている。この人はきっと救い主だ」と思ったのです。

彼は、イエスさまが御国の王であることを信じ

ました。彼はイエスさまに一つのお願いをしました。「イエスさま、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください。」

この犯罪人は、「あなたの御国」と言っています。「御国」はイエスさまのものだと信じていたのです。イエスさまは御国を治められる王、支配者です。ですから、御国においてになるときには、このわたしを思い出してください、と頼んだのです。

イエスさまは、彼の人生の最後のお願いを聞き入れてくださいました。そしてこう約束されました。「はっきり言うておくれ、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」

この犯罪人のお願いは謙虚なものでした。終わりの日、イエスさまが再臨され、実際に御国を支配されるときに、わたしを思い出してください、というお願いでした。でもイエスさまは、それをはるかに超えた素晴らしい約束をされたのです。「はっきり言うておくれ、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」

イエスさまもこの犯罪人も、もうすぐ息を引き取ろうとしていました。イエスさまは、その人に、「今日、あなたはわたしと一緒に楽園にいる」と約束してくださったのです。楽園の鍵をもっておられるイエスさまが、そう言うてくださったのです。これ以上、確かな約束はありません。

この犯罪人は悪いことをしたのに、なぜイエスさまはそのような約束ができたのでしょうか。それは、イエスさまが、その犯罪人の身代わりとして、十字架の上で刑罰を受けてくださったからです。ご自分を救われなかったのは、そのためでした。イエスさまは、ご自分は罪を犯されたことのない、聖い神の子です。しかし、罪人の身代わりとして十字架上で刑罰を受けてくださったのです。

だから、イエスさまは、信じる者はだれにでも同じ恵みを与えてくださるのです。このイエスさまを信じるように、私たちを招いてくださっています。
(後藤公子)

[今週の暗唱聖句]

ルカによる福音書 23章43節

するとイエスは、「はっきり言うておくれ、
あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

〈ねらい〉

十字架にかかられたイエスさまが、楽園への鍵を持っておられる。イエスさまと共に楽園に入れるよう、自分の救い主としてイエスさまを信じる。

〈展開例〉

イエスさまは十字架にかけられました。二人の犯罪人と一緒に。

一人の犯罪人は、「お前はメシヤではないか。自分自身と我々を救ってみろ!」と言いました。

もし、みんながこの犯罪人だとします。痛くて、怖くて、苦しい十字架についていたら、「早くこの辛さがなくなってほしい」と思いますよね。「この辛いところから降ろしてくれたら、イエスさまを神さまと信じよう」と考えるといませんか? 苦しい時の神頼みです。

もう一人の犯罪人は、「我々は悪いことをしたのだから、その報いとして十字架につけられて当然だ。でもイエスさまは何も悪いことをしていない」と言いました。もし自分が前の犯罪人なら、「何をかっこつけてんだよ、もう死んじやうんだよ」と言いたいだろうね。「そんなこと言える状態じゃないでしょ、痛くて、怖くて、辛いだから」と思うかもしれない。けれども、もう一人の犯罪人は言えたんだ。

なぜでしょうか? この犯罪人は、十字架の上でイエスさまと出会ってしまったんだ。十字架にかかっておられるイエスさまのお姿を見て、イエスさまが救い主だと信じることができた。そうし

たら、次に何がおこったと思う? イエスさまがこの犯罪人に、「今日、あなたはわたしと一緒に楽園にいる」と楽園に行く約束をくださったのです。楽園に行く鍵を持っておられるのはイエスさまなのです。わたしたちも、イエスさまを信じてイエスさまと一緒に楽園に行きましょう。

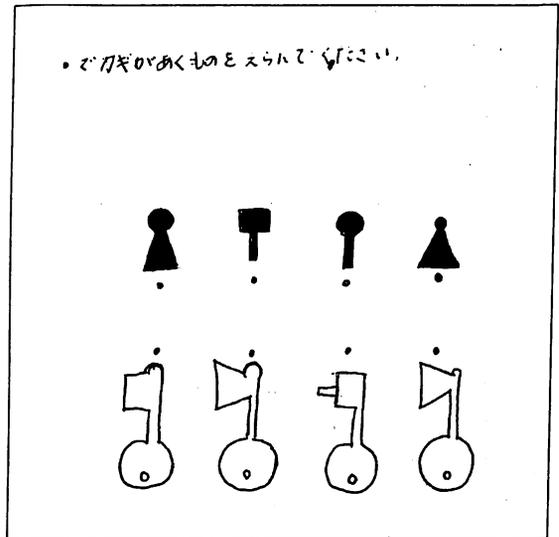
〈お祈り〉

天の父なる神さま、どんな時もイエスさまを見上げて、楽園に行ける者にしてください。

〈パズル〉

鍵あわせのパズルをする。

鍵が開くものを線で結びましょう。



〈主旨〉

神は、イエス・キリストによって私たちが悔い改めた今日という日に、私たちを救われる。

〈展開例〉

- イエス様が十字架に架けられた時、イエス様だけじゃなかったね。あとほかに、何人、十字架に架けられたかな？（二人）
- その二人はどういう人だった？（犯罪人／強盗）
そうだね。この二人は罪を犯したから、十字架の刑罰を受けたんだね。
- でもイエス様は十字架に架かる必要があったのかな？（ない）
そうだね。イエス様は何にも罪を犯していないのに、十字架に架けられた。
- 何でかな？（私たちを救うため：私たちの罪の刑罰を身代わりに負ってくださったため）
この犯罪者の一人も、イエス様が「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言って、救ってくださったね。
- 何でかな？（悔い改めたから：罪を罪として認めたから。イエス様に願った（求めた）から。）
そうだね。この犯罪者の一人は、自分が犯した罪を認めたんだね。この人は、とっても悪いことをずっとしてきたかもしれない。でも十字架に架かった時、同じ十字架に架けられたイエス様に出会った。その時、初めて自分の罪がわかったんだね。そしてイエス様に正直に言った

んだ。「私は罪人です。あなたは何も悪くありません。せめてイエス様、あなたが御ご自身の国に入られる時は、私を思い出してください」って。そう言ったらすぐイエス様は答えてくださった。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と。

今までどんなに悪いことをしてきた人でも、イエス様と出会って、正直にそして心からイエス様の前で自分の罪を認めるなら、イエス様は必ず救ってくださるんだ。

私たちにとっても罪の大小関係なしに、どんな小さな罪でも神様にとっては罪だということを知って認めることが大切なんだよ。その罪を認めて神様にお祈りして正直に言うことを悔い改めって言うんだ。その悔い改めの祈りがささげられる時、同時にイエス様は今あなたはわたしと一緒にいるといつも言ってくださってるんだよ。もうすでに楽園に行く約束をしてくさるんだ。これからも罪をちゃんと罪と認めて、同時に赦してくださるイエス様に感謝していこうね。

〈祈り〉

神様。私たちの罪をもイエス様が十字架に架かって、お赦しくださってありがとうございます。どうかいつもイエス様の十字架を覚えて、正直に自分の罪を神様に言うことができるように導いてください。そして今日わたしと一緒に楽園にいると言ってくださったイエス様にいつも感謝し続けることができますように導いてください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。



〈ねらい〉

キリストの十字架の苦しみを知る。

〈展開例〉

今週は受難週です。教会にとってとても大切な週です。十字架についてしっかり考えましょう。

○ルカ福音書23章13～25節を読む

質問① ここはどんな場面ですか？

質問② 登場人物の名前をあげましょう。

質問③ それぞれの人の言葉、行いを言ってみましょう。(朗読劇風に、子どもたちが役を分けて読むのも印象に残る。)

質問④ 「もう一人の犯罪人」とイエス様の会話を読みましょう。

質問⑤ イエス様は、もう一人の犯罪人にある約束をしてくださいました。どういう約束ですか？

質問⑥ この約束から、あなたは何を発見しますか？

○話し合ひましょう

犯罪人は二人いて、全く違う態度でイエス様に向かいました。私たちのとるべき態度はどちらですか？

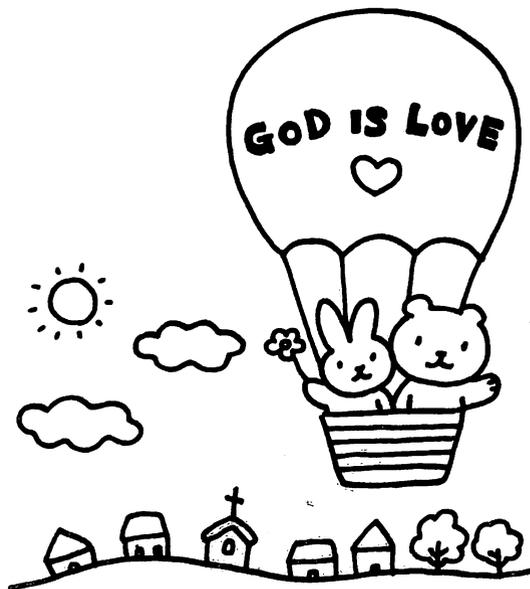
〈祈り〉

神様、十字架の贖いを感謝します。イエス様にいつもついていくことができますよう、お守りください。アーメン。

〈コラム〉

CS 教師の学び、どうしてますか？

坂戸教会では、2004年から8年間、CRCのゴ－宣教師をお招きして、月に1～2回の学びをしてきました。ETA訓練会、コーヒーブレイク訓練会、テモテ訓練会など、本当に多くのことを学ぶことができ、感謝しています。近隣の新座志木教会や上福岡教会からも参加者が与えられ、よき交わりの時でもありました。小さい子どもを連れて夜の学びは楽ではありませんでした。たくさんの恵みをいただきました。



(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

「永久刑罰に悔しないほど小さな罪がないように、真に悔い改めている者にも永久刑罰をきたらせることができるほど大きな罪はない。」

(ウェストミンスター信仰告白15:4)

イエス様といっしょに十字架にかけられている二人の強盗。彼らは私たちそのものだ。

ぼくらはみんな、十字架の呪われた死に価する。神の怒りを受けている。このまま十字架の上で、何の希望もなく死んで、永遠の滅びを味わうしかない。そういう自分の真実を、まず知らねばならない。

私たちは、そのことを知らなさすぎる。十字架にかけられている自分を、決して認めたくなくて、そこから目をそらしてばかりいる。

イエス様は、そういう私たちを救いだし、楽園へと連れ戻すために来てくださり、死んでくださった。でもそんなイエス様に罵声を浴びせ、彼こそが救い主だとは絶対に認めようとしな。それが罪人。

イエス様は、どこまでも罪人を愛しておられる。裏切られても、疑われても、愛されなくても、「彼らは何も知らないのです。おゆるしください」と

祈ってくださった。

それでもやっぱり、このイエスを馬鹿にする者がいる。残念だけど、それが罪人の現実。イエス様は、それでも祈っておられる。いつか、私たちが悔い改める日のために。

十字架にかけられている二人のうち、一人は悔い改め、楽園に入れていただいた。私たちも同じように、楽園に入れていただけるのだ。ただイエス様を信じるだけで。イエス様が救えないような罪人はいない。真に悔い改めている者にも裁きをもたらさうほど大きな罪はない。

でも、もう一人は、結局悔い改めることなく、永遠の悲しみに最後は呑み込まれていったのだろう。イエス様は、彼のためにも祈ってくださったし、死んでくださった。でも、彼は楽園にはいない。彼が悔い改めなかったから。赦されることは当然と考えてはいけない。赦されないまま、十字架で死に、永遠の滅びに至るものもいる。

イエス様といっしょに十字架にかけられている二人の強盗。彼らは私たちそのものだ。

その私たちを楽園に連れ戻すため、イエス様が救いを祈ってくださり、十字架にかかって死んでくださった。私たちも、イエス様に憐れんでいただき、「わたしを思い出してください」とすがりつこう。

